清新二中だより

本校教育目標
1　豊かな心で、互いに敬愛できる人　(敬愛)
2　進んで学び、深く考える人　(知性)
3　健康で明るく、自ら鍛える人　(健康)
4　責任を重んじ、勤労を尊ぶ人　(責任)
5　礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人 (礼節)

修　学　旅　行　－２万２千歩－

校長　白　石　亨

京都の素顔は裏通りにある。

今回、修学旅行で宿泊した祇園周辺においても、その裏通りには飾らない京都があった。一歩その路地に入ると黒い格子のある家並みが連なっていた。家々の二階の窓には日焼けした京簾も掛けられていた。路地の角には看板の目立たぬお香を商う店があり、古めかしいガラス戸の飾り窓には商品が並べられ、短冊には商品名「はんなり」と書かれた薄墨の枯れた筆づかいの文字があった。ガラス越しに拝見しただけでも嬉しくなる。店先には打ち水がまかれ、伝統と格式を重んじる京都の人々の律儀な暮らしぶりが息づいていた。

「修学旅行だからこそ京都の素顔に触れてもらいたい」。以前よりそう思っていた。

実は昔の修学旅行はこれが難しかったのだ。

自分が教員になりたての約４０年前、京都市内においても多くは団体行動だった。清水寺、三十三間堂、金閣寺など、名所・旧跡を観光バスでピンポイントで巡る修学旅行。確かに、生徒全員で同じものを観たとの共有感はもてたが、京都の裏通りを歩くなど、古い街並みに触れることはできず、京都本来のよさは体感できなかった。当時の辛口の論客からは「黒い学生服を着た生徒たちが、カラスの行列のようにゾロゾロと同じ名所ばかりを見学するのはいかがなものか。旅本来がもっている楽しさを阻害しているのでは‥」との批判的な声もあった。

このような経緯もあり、現在、修学旅行の主流は中日一日を班行動にあてる学校がほとんどになっている。

本校の修学旅行も二日目の京都プランは白紙だった。どこを見学するのか･･･交通手段は･･･移動時間は‥と、生徒自身の力で創り上げていく修学旅行。事前学習では時間と労力をかけ、まずは机上での奈良・京都の旅を幾度となく体験してもらった。あれこれと自分たちでプランを悩むところに机上の旅の楽しさがある。

そしていよいよ迎えた修学旅行二日目。京都班行動が開始された。

先生方からの管理・監督から離れての丸一日。生徒諸君にとっては、さぞや、自由な行動、自由な時間に解放感が広がったことと思う。だがその半面、生徒一人ひとりには重い責任感と自主的な判断力とが強く求められてくる。初めての不慣れな京都の土地で行動することは難しい。だが、仲間と一緒ならば乗り切ることができる。

午後４時半、連泊となる宿舎前で待っていると、ぞくぞくと生徒たちが帰ってきた。

どの生徒の顔にも笑顔が見える。大きく手を振ってくれる生徒もいる。ある班の男子は到着するやいなや「校長先生！清水寺から歩いて帰ってきました」と額に汗して話してくれた。「今日一日で２万２千歩も歩きました」とニコリと自慢げに語ってくれた。その顔にはやり切った満足感・成就感が表れていた。

清水寺から宿舎までは駅にして二駅分はあるであろうか。‥９月の残暑厳しい中、京都市街を自分たちの力だけで歩き、道を間違えたり、路地で迷ったり、地元の人に道を尋ねながら歩いてきたのであろうか。この班に限らず、どの班も京都の街並みを肌で感じ、笑顔で班行動をやりきってくれたことがとても嬉しく感じられた。

そして、生徒たち以上に笑顔満面だったのが、第３学年の先生方だったように思える。

この日の生徒たちの頑張る姿をどれほど待ち望んできたことか。入学当初よりこの日を想定し、１年生での都内巡り、２年生での鎌倉の班行動など、生徒の自主性や責任感を伸ばすことに尽力してきたからだ。人は一人の人間として信頼され、すべてを任されたときにこそ大きく成長できる。その先生方の期待にみごとに応えてくれたのが３年生なのだ。自分たちで考え、自分たちでやりとげた修学旅行だからこそ価値深い。

仲間と寝食を共にした３日間。いつまでも記憶の奥底に残る充実した修学旅行となったことと確信している。